

Presented By:

Tsundere Translations

<http://tsunderetranslations.blogspot.com/>

Translator: Tsundere Yuriko

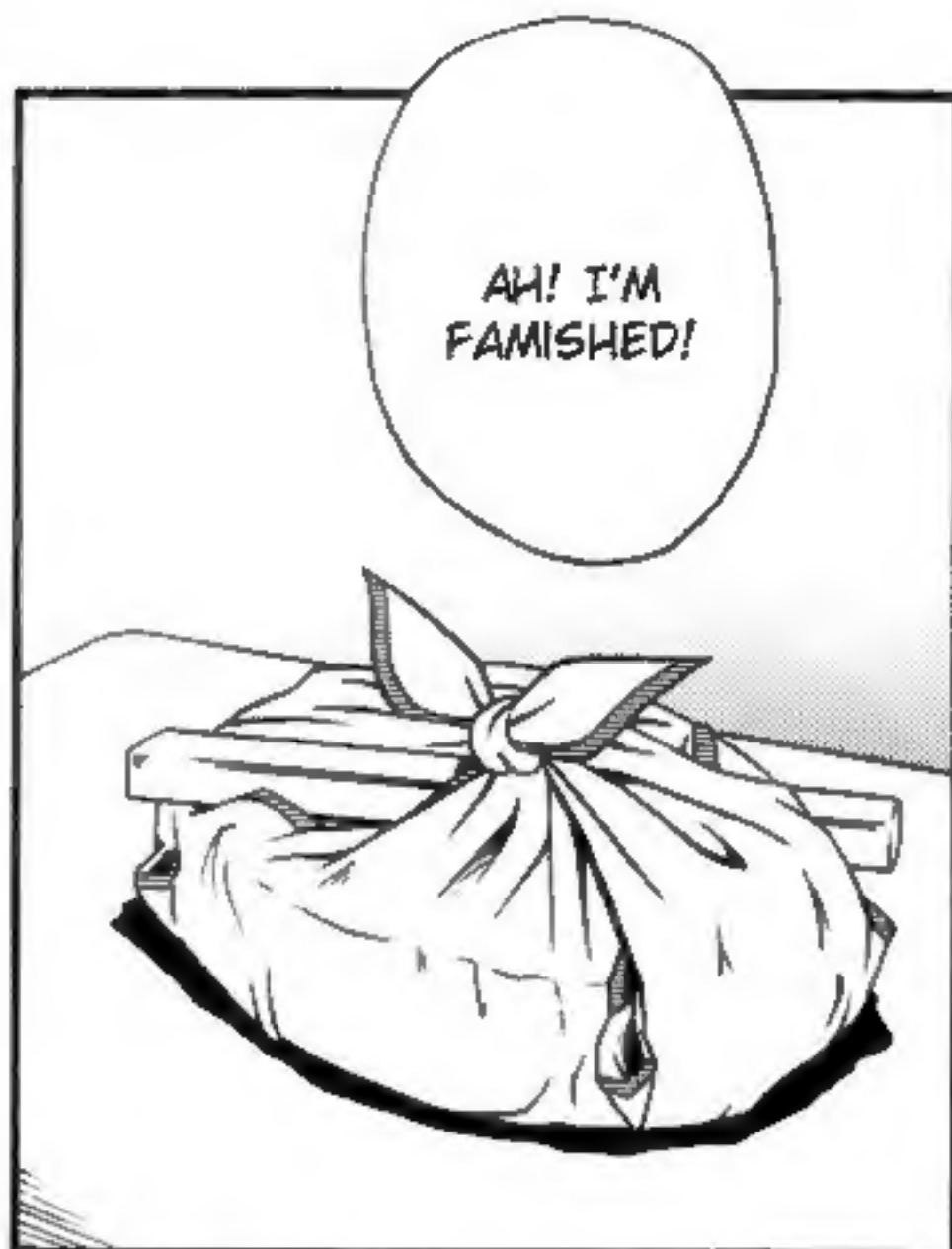
Editor: Beotkkot



RAKI ☆ SUITE = lucky ☆ star
FAN BOOK

ふにゃふにゃ おしゅる





AH! I'M
FAMISHED!



I'M
BACK
!

Welcome back!

Ah,
there
she is.

AH,
SHE'S
BACK!



YEAH, SHE'S
ALWAYS GOING
OUT TO BUY
SOMETHING
FIRST,

SO SHE
SHOULD
BE HERE
SOON.



IS KONA-CHAN
COMING?

HM, WONDER
IF THE STORE
IS CROWDED...



!?

sfx: poke





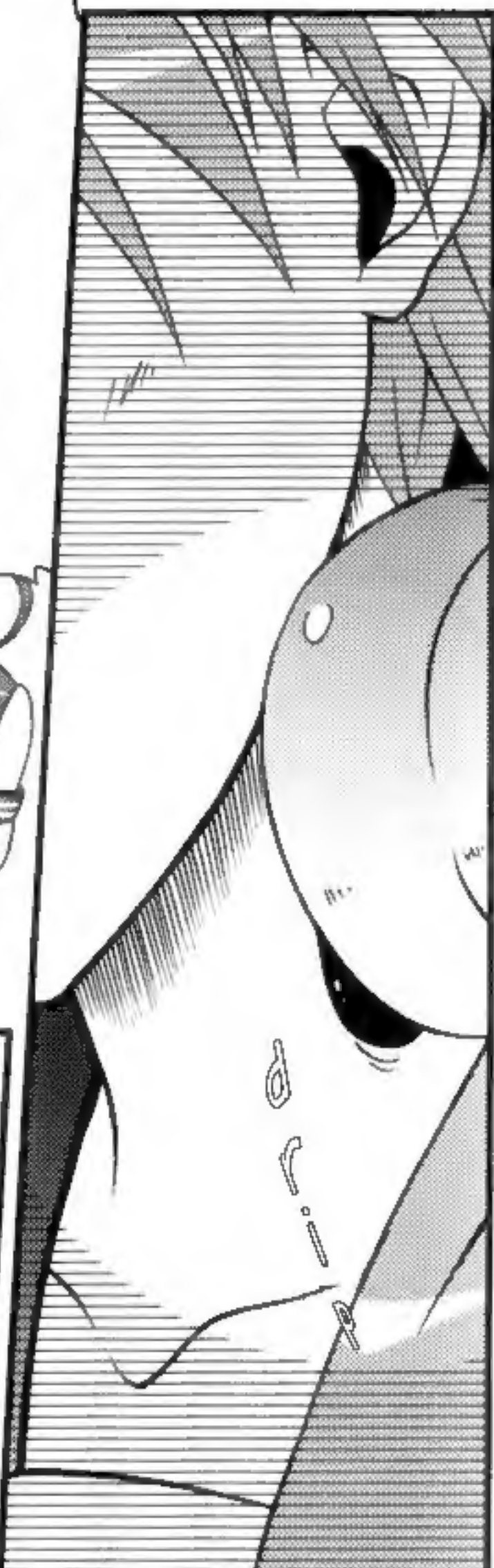
sfx: shock!



W A H H H ! !



HM...



HM?

OH YEAH...
I CAN'T EVEN
SEE IT, SO,
SURE, THANKS.

SAY, KAGAMI,
CAN GET THAT
FOR YOU?

It's really
ok for me
to have it?

Please,
go ahead.

gleam!

.....

Jeerz...

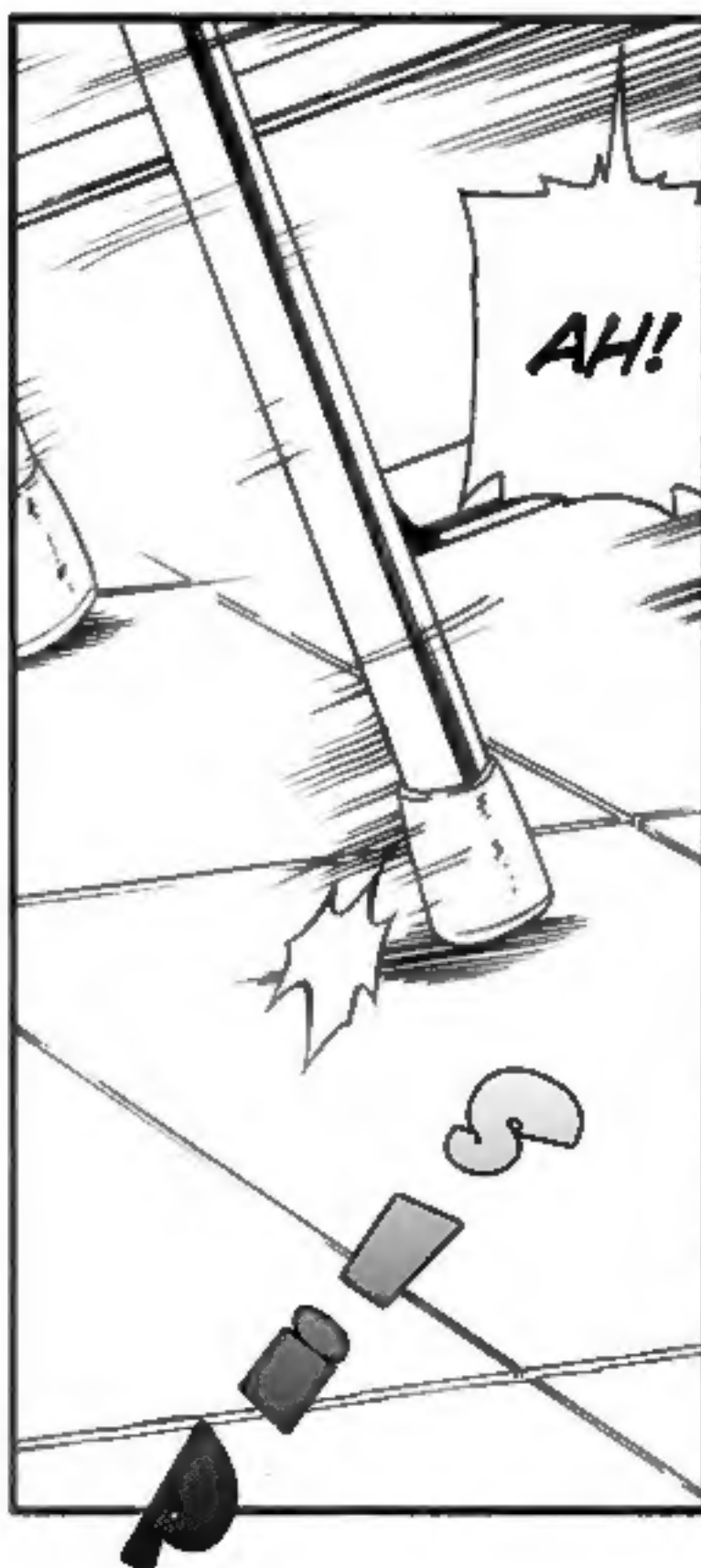
rustle

OH, I DON'T
NEED A
HANKERCHIEF.

HERE,
USE THIS.

HM? BUT IF
YOU USE YOUR
OWN, WON'T IT
GET DIRTY?

スfx: WOOSH

















EH? BOTH
KONATA AND
MIYUKI?

THE OTHERS
ARE RUNNING
LATE.



ALRIGHT THEN!
LET'S.. GO?

ONEECHAN!
SORRY TO KEEP
YOU WAITING!

UM...

WHY
ARE YOU
ALONE?



HM?
WHAT HAP-
PENED WITH
KONATA?

KONA-CHAN
SAID TO GO ON
AHEAD.

YUKI-CHAN HAD
SOME STUDENT
COUNCIL WORK.



AH... I SEE.

SHE'S
PROBABLY
GETTING
LECTURED
AGAIN...

AH WELL...

SHE WAS
CAUGHT BY
KUROI-SENSEI...





DO YOU
GET WHAT
I'M SAYING?

IT'S NOT THE
HEALING TIME
I'M CONCERNED
ABOUT, IT'S THE
PLACE...



SHE
DOESN'T
GET IT AT
ALL.

GLEELES



BUT WHAT'S
SO BAD ABOUT
A MARK ON
YOUR NECK?

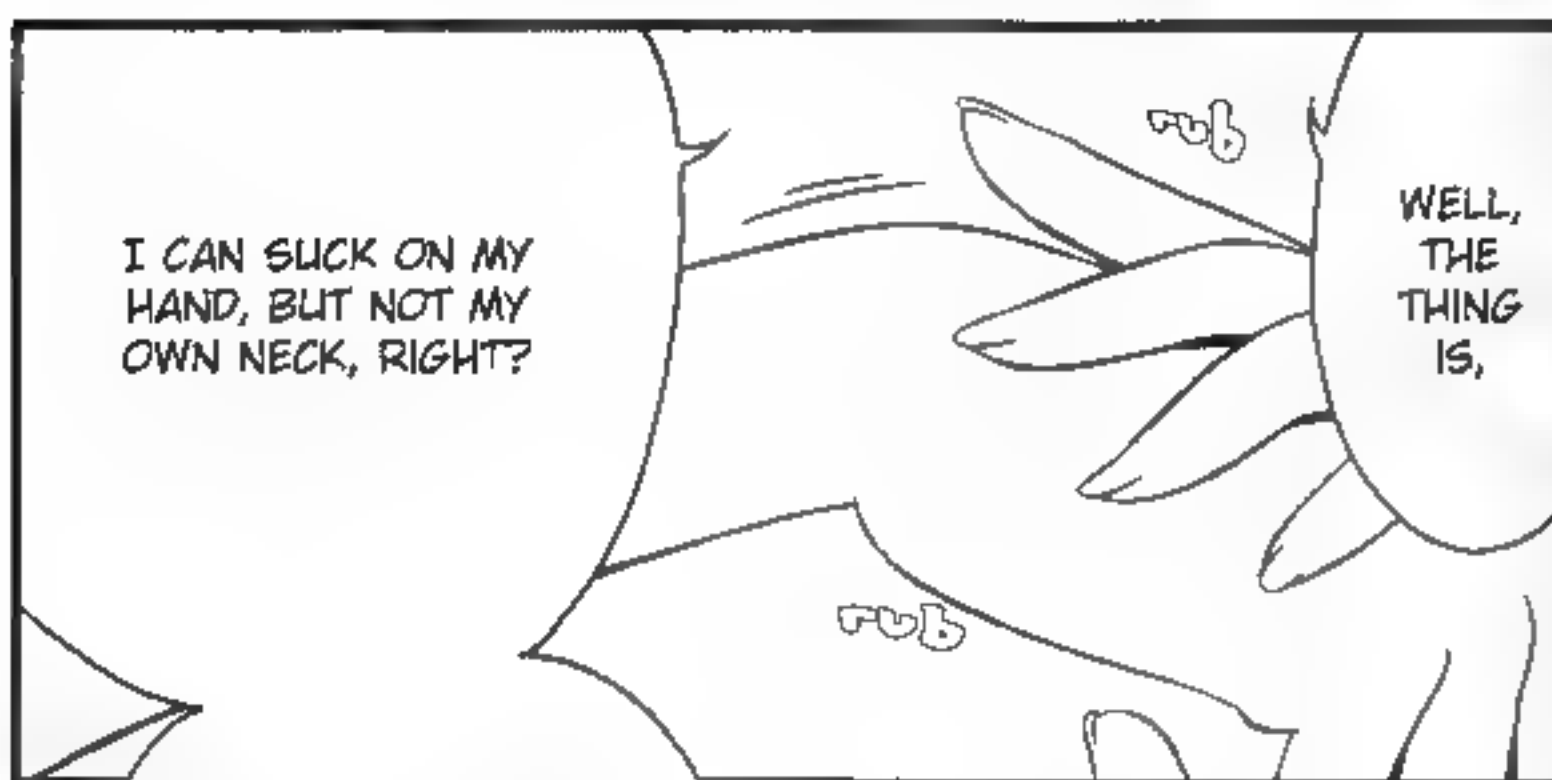
WELL,
IF SOMEONE SAW
IT, THEY WOULD
GET THE WRONG
IDEA.

THE WRONG IDEA?
BUT IT'S JUST A
SPOT THAT IS
JUST GOING TO
HEAL, RIGHT?



GUESS IT
CAN'T BE
HELPED...

chomp





RECEIVING
SOMETHING
LIKE THAT IS
A LITTLE EM-
BARRASSING.

Konata probably
thought of all
that when she
did it.



AH...



AND SO

FOR
THAT

REASON
...



I SUPPOSE IT
WOULD BE NICE
IF WE LIVED IN A
WORLD THAT
DIDN'T JUDGE
ON LOOKS,
HUH?

Oh Nice
reaction

D-SUNG



HM,
YEAH,
WELL...

EVEN THOUGH I'M
HIDING IT, PEOPLE
DON'T KNOW, SO, I
DON'T KNOW, IT'S
TRICKY.

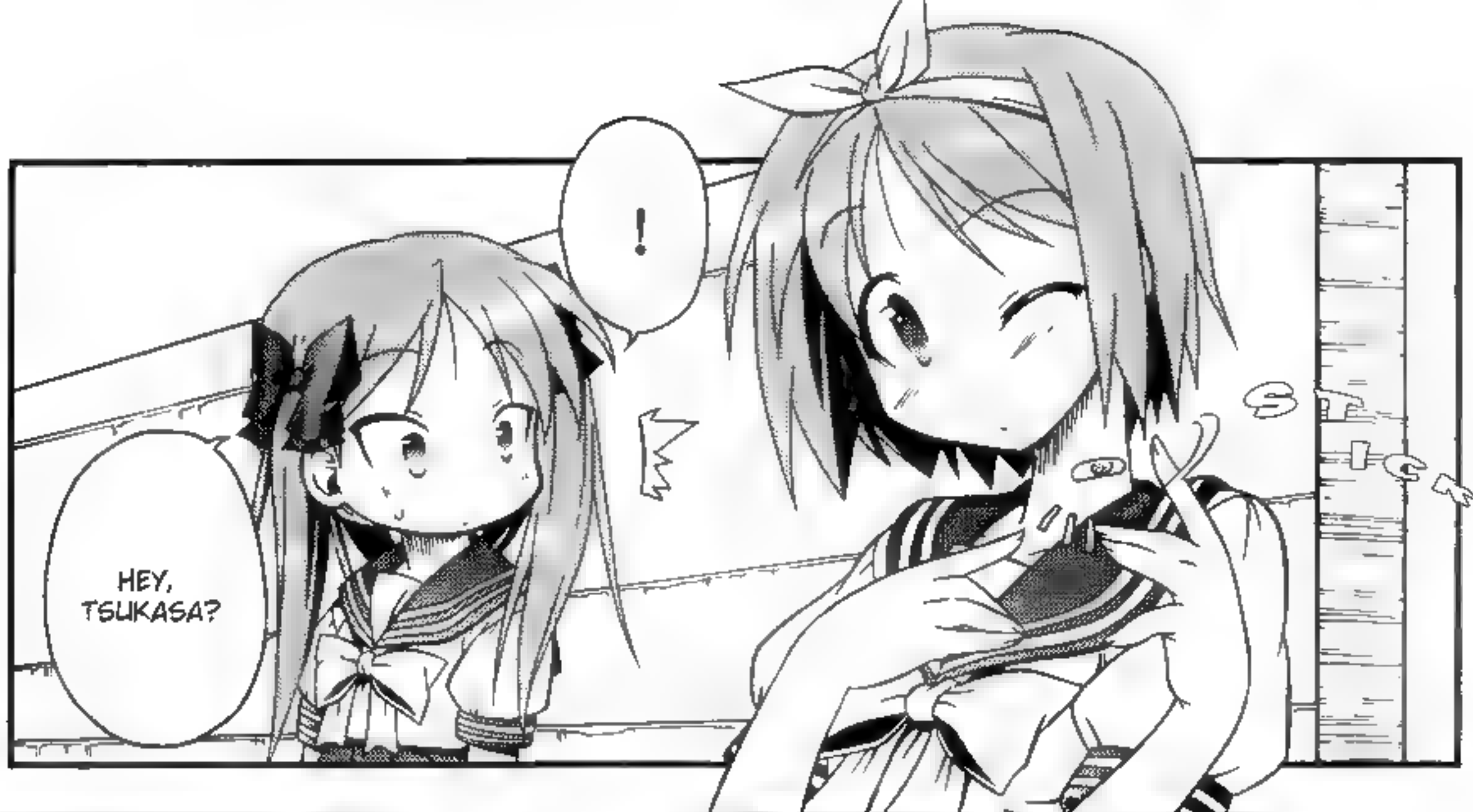


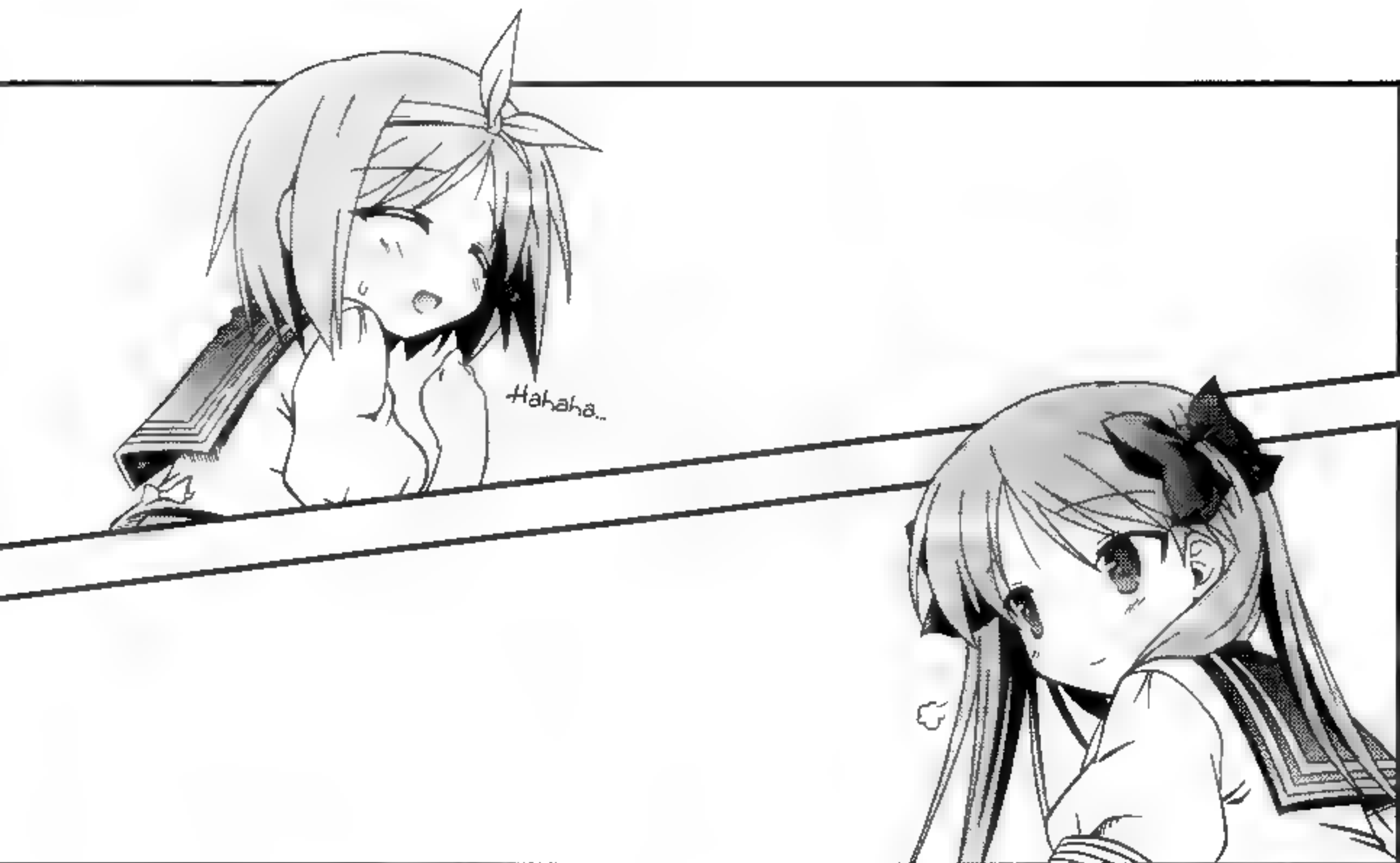
HM?

THEN DOESN'T
APPLYING A
BANDAGE MAKE
IT STAND OUT?

Did I do the
right thing
giving you
one?









SINCE SHE DID IT
TO ME, WHAT DO
YOU SAY WE STICK
THIS ON KONATA
INSTEAD?

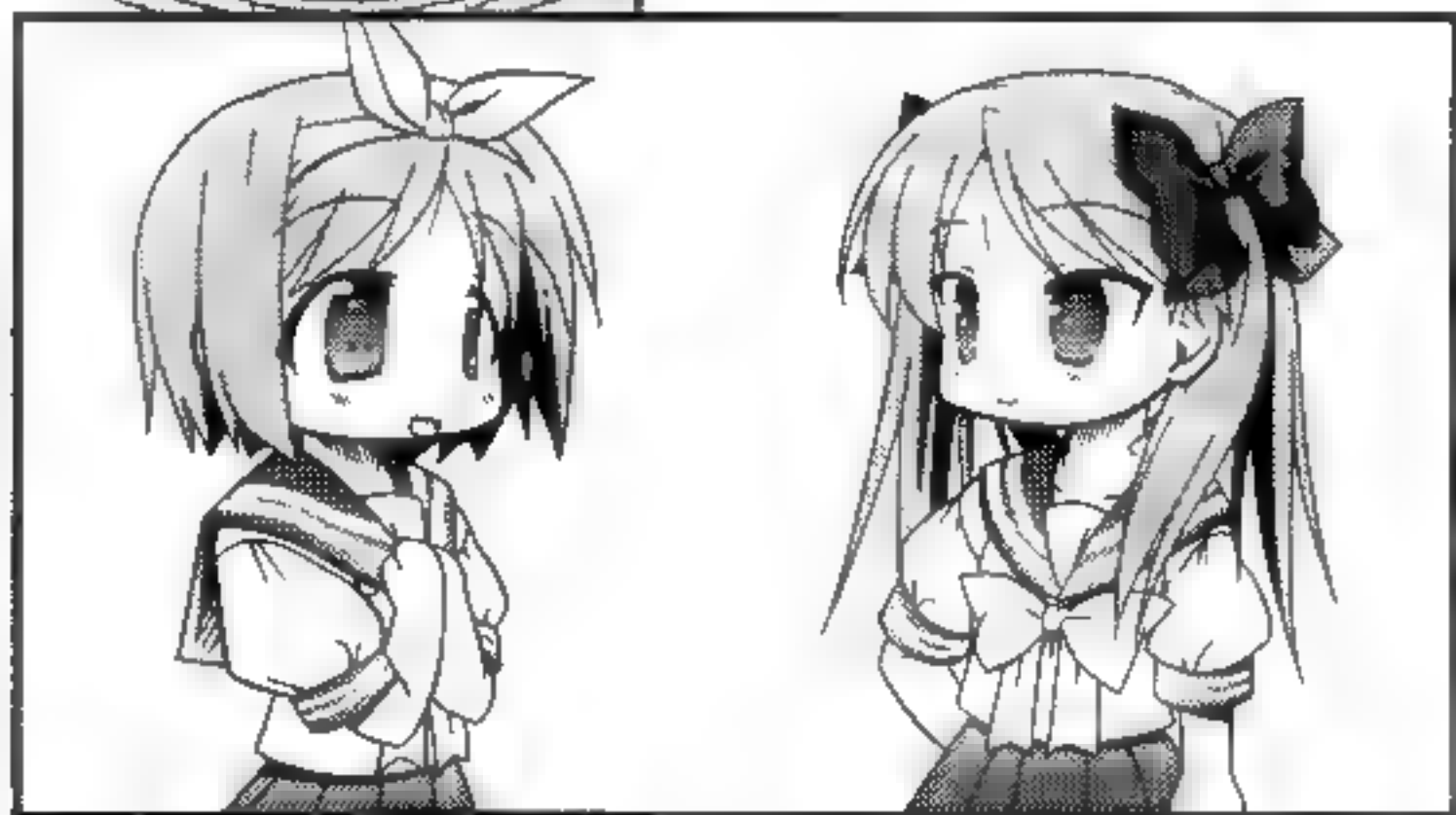
I APPRECIATE
YOU THINKING
OF ME.

BUT YOU'RE NOT
IN NEED OF THIS.
LET'S SAVE THIS
FOR SOMETHING
MORE IMPORTANT.



STICK IT ON
KONA-CHAN
HUH?

YUP! LET'S GO!



*Translator's note, these 4 lines are 99% from the intro song from the anime, the joke is the letters slightly changing each panel, except for a drastic change in the 3rd

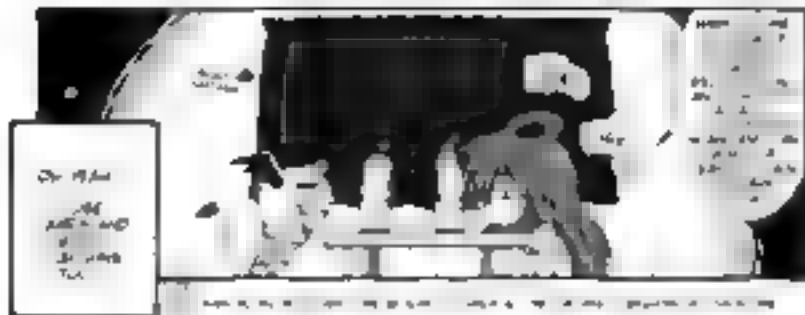
CONGRATULATIONS! LUCKY STAR SECOND BOOK RELEASE!



IS KONATA CAUGHT UP
WITH KAGAMI CUTE?
OR WOULD KAGAMI
BEING CAUGHT UP WITH
KONATA BE CUTE?
HMMM!
REGARDLESS, TOGETHER
THEY'RE SO VERY MOE!
AND THAT'S THAT!

RED RIBBON REVENGER

魔公子



細く小さな指が、薄く小さな機械に触れる。

フローリングに直置きされた機械が、その指から命を与えられたかのように駆動音をたてはじめた。

機械の端子の先が繋がれたテレビに軽い音とともに社名ロゴがいくつか現れ、消える。

そしてテレビ画面はホワイトアウト。耳をすますと遠くからノスタルジックな音楽がフェードイン。

真っ白い画面にゆっくりと鉛筆画のような、モノトーンの柔らかな絵が現れた。

小さな男の子と女の子。

音楽と絵のタッチが、それが回想シーンなのだと主張していた。

機械を目覚めさせた小さな指が、今度はその機械に繋がれたコントローラーを操作する。

再び画面はホワイトアウト、伴うように音楽も消えてゆく。

次の瞬間、ノリのよいギターのイントロとともに、原色に近い髪色の少女が満面の笑顔で画面に現れた。

はじまるのはアニメーション。音楽にのって少女が走り出す。

そこでもう一度コントローラーを操作。

フツリとアニメーションがカットされ、先ほどのギターのイントロがオルゴールアレンジされた曲が流れ、画面の半分ほどを大きなタイトルロゴが占めた。

さらにコントローラーを操作すると、ロゴの下に表示された「New Game」と「continue」と「おまけ」の文字の上をカーソルが滑った。

何故「おまけ」だけ日本語なのかは謎だが、カーソルは「continue」を選択した。

「こなたー、終さんいらっしやったぞー」

唐突に外部から聞こえた声にコントローラーを握った小さな手が止まった。

コントローラーはこなたの手から

来訪者である終かがみの手へと渡っていた。ベットを背もたれ代わりに、足を床に投げ出した姿勢で、開いて置かれた攻略本を見ながら単調にボタンを押していく。

部屋の主でありゲーム機とソフトの所有者であるこなたはデスクへ。いくつかの冊子を開いて面倒そうにシャーペンを走らせている。

「ねえ、こなた」

「んー？」

かがみの問いに、口を開かずにでる音だけでこなたは返事をする。

「あたし確か、勉強の手伝いして欲しいって言われてきたと思ったんだけど、なんでこんなよくわかんないゲームを攻略本片手にやらされてんの？」



シャーペンを置いて回転椅子で振り返る。

「んー、それねー。残りCG1枚でコンプリートなんだけどさ、それが稀にしか発生しないランダムイベントなんだよねえ」

「んな事聞いてないわよ」

座っている位置の関係で、かがみはこなたを見上げる形で不機嫌顔を投げよこす。

「つまりね、このままじゃあたしはそれが気がかりで勉強できないから、かがみがやってくれればあたしは勉強ができる、と」

「だったらあんたがこれさっさとやっちゃいなさいよ！」

勉強はあたしが教えてあげるから！」

『こなちゃんは悪くないよ！』

割ってはいるように声が聞こえた。

声の主は部屋の中にいるこなたでもかがみでもない。

テレビの中。つまりはゲームの中の女の子が発したもので、このゲームの特徴であるシステムの、要約すれば「主人公の名前を呼んでくれる」システムを使用して多少不自然ながらもこちらへと呼びかけてきた。

「ほら、かがみいー、その娘も悪くないって言って……って、おおおおおおおおお、かがみつ、それっそれだよっ、ランダムイベントっ！」

椅子から滑り降りるようにこなたはかがみの手の中へと飛び込んでいった。正確にはコントローラーのある場所へと。



結局コントローラーをかがみから奪い取ったこなたは、かがみの太腿を胸の下に敷いてゲームをやり始める。
「あんたねえ……」

「ありがとーかがみ、愛してるよー」

かがみはため息を一つ落とすと、こなたの下に敷かれた自分の腿を軽く動かす。

「ほら、あんたがそれやってる間に今勉強してたところ見といてあげるから、ちゃんと自分で座んなさい」

先ほどとは逆に、こなたがゲームの前に、かがみはデスクの前に立った。

かがみは開かれていたノートと参考書を照らし合わせて目を通していく。

次第にかがみは、参考書の内容とノートの内容と自分の思考に集中していつてしまっていた。

読書家の中に、文字を追いつめると周囲への対応がわざわざなりになっていく人間がいる。かがみもそのタイプだ。

「ねえかがみー」

「んー？」

かけられた言葉の意味がよくわからなかった時、どうでもよかった時、概ね否定的な時、「んー？」と答える。とりあえず保留するために一応疑問系で流しておくためだ。

「かがみ、きいてるー？」

「んー」

かけられた言葉に概ね肯定的な時、どうしてもよかった時、「んー」と答える。あまりはつきりとした言葉にしない事で、後でいくらでも訂正がきくからだ。

どちらにしろ無意識的に、曖昧ではあるが肯定と否定をある程度判断していると言っている。ある程度、という前置きつきではあるが。

「かがみー？」

『あたしの事……好き？』

「んー」

しばしの間、部屋の中にはゲームのBGMだけが流れた。

ふと、かがみは我に返る。

「……ん？ あれ？ 今のゲームの声……？」

振り返ったかがみの胸へと飛び込んでくる小さな塊があった。こなただ。

突然の事にバランスを崩してベットへと倒れこむ。いや、そうなるようにこなたに誘導されたのだ。

「わ！？ ちょ、こなた？ こ、こら！」

「かがみん萌えー！ 嫁になってー！」

仰向けにベットに寝転んだかがみの上にこなたがうつ伏せに乗っている形だ。

かがみの胸をクッションにしてこなたの頭がぐりぐりと動く。

「な、何！？ なんなのよー！？」

こなたの部屋の外、扉の前にはこなたの父、泉そうじろうが菓子车载った盆を持って立っていた。

中からはこなたとかがみの騒ぎ声が聞こえてくる。そうじろうは思う。





終

「どのタイミングで入っていったらおいしんだろうか」
「むしろこのままここで聞き耳をたてておくべきだろうか、いやしかしそれはさすがに……」
左手のみで盆を持つようにし、右手はノックをするタイミングを計る。
右手の逡巡が呼び込むのは、じゃれあうような若い娘達の声。
「よかった……俺、父親やっててほんつとーによかった……!」

そうじろうは己の幸せを天に感謝した。

※ 登場するゲームは実在するものをベースに適当にいじったものです。あまり深読みしてもなにもできてきません。

奥付

せるふいつしゅ2 2007.8.19. 初版

発行：I'LL 調（あいりゅちよう） あかりりゅりゅ羽。

印刷：日光企画 様

HP—<http://www.aa.alpha-net.ne.jp/ryu2w/index.html>

Mail—ryu2w@m17.alpha-net.ne.jp

禁無断転載複製